

1. エリア毎の目標（案）

大ゾーン	中ゾーン	小ゾーン	エリア	目 標
内陸性湿地	本土部	淡水池	旧淡水池周辺	ヨシやヒマガマの群落が池内に残るような環境（ヨシゴイの繁殖環境）
			浄化池周辺	水田のような環境（タマシギ、ヒクイナなどの繁殖環境）
			長靴池と田の字池	やや深めの池沼（カイツブリ、オオパンの繁殖環境）
			竹内ヶ原・百合池	泥地や開水面を中心とした環境（淡水性のシギ・チドリの生息環境）
	汽水池	三島池	海水が出入りする汽水湿地	
	林地	鴨場側と南側に延びる並木		
干潟および海域	干潟	すずヶ浦	現在よりも広く干出し、より多くの淡水が流入する泥干潟として、シギ・チドリ類やサギ類、カモ類の生息場所。	
		ウラギク湿地	観察舎からよく見える位置にあるため、陸域から海域への連続性を示す自然環境として、市民にわかりやすく表現する。	
		ゆりが浜	消失したゆりが浜の環境を現場もしくは周辺域で再現し、干潟生物との触れ合い環境の復活をめざす。	
	海域	深み	暗渠前	土砂を投入して埋め戻し、干出域を増やす。埋め戻しの範囲については、繁殖しているカワウと、主に冬季の荒天時に三番瀬から避難してくるズズガモやカンムリカイツブリへの影響をみるため、上北岬あたりまでとしたい。
		島	UFO島	橋をかけて立ち入ることができ、市民が干潟を体験できるような干潟と観察施設の整備を検討する。
周辺緑地帯及び丸浜川	周辺緑地帯		キョウチクトウやニセアカシアなどの外来種が目立っている。地域の自然を表現するような樹種を検討し、更新を進める。閉鎖的な状況（特に国道側）の改善、行徳湿地へ一般の方が関心を持っていただけるような手法の検討、野鳥の生息地と利用の折り合いの検討	
	丸浜川		地域の自然環境と歴史について、気軽に散策しながら体験（体感）できる場。自然環境として、水辺の生き物・植生。歴史として、船溜り・滞筋・堤防。表現として、効果的な展示物の設置など。	

2. 利用を図る上での特徴的な機能の“目標達成のための施策”及び“問題点”と“対応案”の検討

	特徴的な機能	目標達成のための施策（参考資料5-1）	施策実行に係る問題点（素案）	問題点に対する対応案（素案）
①	東京湾奥の自然（歴史を含む）を感じる場所	<ul style="list-style-type: none"> ・淡水源の確保 ・限られた面積のなかで移行域としてのあり方を検討する ・効率のよい管理方法を見出す ・泥の移入 ・深みの埋戻し 	<ul style="list-style-type: none"> ・河川水、下水処理水の導入は物理的に困難 ・本土部周辺は、海域における新たな生息環境創出が困難 ・管理手法の工夫の限界 ・泥の入手・輸送が困難 ・工事中道路の確保困難。干潟創出に比べ費用対効果が低い 	<ul style="list-style-type: none"> ・限りある淡水源を活用した環境保全、鴨場北池との環境面での連携。 ・移行域のゾーン設定と三島池汽水化実験成果の活用による環境創出。 ・維持管理仕様の見直し（頻度・エリアにメリハリをつける）。 ・代価土砂材料による環境創出。 ・深み埋め戻しは当面見合わせ、他の効果的なものを優先させる。
②	景色を楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・園内観察会について、メニューを拡げ、さらにライトユーザー向けの設定を検討する ・当地の環境に適した植栽のあり方について検討が必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・観察会の参加者のレベルに合わせた説明 ・当地の環境に適した植生のあり方について検討されていない 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しめる視点場へ誘導する動線と快適な施設の設置 ・検討する場の設定と県民の理解を得る施策
③	ボランティア活動の場	<ul style="list-style-type: none"> ・メニュー作成、ボランティアの組織化、満足度の向上、効果的な告知などを行うコーディネーターの配置を検討する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの人材不足 ・コーディネーターがいない 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動ができる場とメニューを増やす ・コーディネーターの育成と配置
④	環境・体験学習の場	<ul style="list-style-type: none"> ・環境・体験学習を積極的に行う ・インタープリターの配置を検討する 	<ul style="list-style-type: none"> ・干潟に触れ合えるところがない ・文化に出会える場がない。 ・インタープリターやボランティアの人材不足 ・安全にアクセス出来る状況の場所が少ない 	<ul style="list-style-type: none"> ・環境学習の参加者のレベルに合わせた説明 ・行徳野鳥観察舎友の会子供支部(仮称)などをつくり、子供が活動出来る場を設ける ・地域の学校との連携の検討 ・コーディネーター、インタープリターの育成と配置 ・干潟の再生、文化を感じ体験できる場の創出
⑤	環境再生の取組	<ul style="list-style-type: none"> ・効率のよい管理方法の模索 ・手法と成果を発表する ・住民、県民をはじめ広く市民のご理解と協力を得られる仕組みをつくる 	<ul style="list-style-type: none"> ・行徳湿地に対する住民の理解度が低い ・効率の良い管理方法を検討する場がない 	<ul style="list-style-type: none"> ・行徳湿地をPRする ・行徳野鳥観察舎友の会子供支部(仮称)などをつくり、子供が活動出来る場を設ける ・検討する場の設置 ・県民参加による管理の検討
⑥	科学的調査の場	<ul style="list-style-type: none"> ・保護区の再生について、これまで行ってきた内容、手法と成果などについて論文として発表する。そのうえで、大学など各機関が行う科学的調査についてコーディネートし、広く市民に向けて告知する ・現在単発的に行われている行徳高校生物部との連携は可能と思われるので高めていく 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報発信の手段が不明確 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報発信のためのシステムとスキームの構築 ・行徳野鳥観察舎友の会子供支部(仮称)などをつくり、子供が活動出来る場を設ける
⑦	野鳥病院の活動	<ul style="list-style-type: none"> ・職場環境として衛生面での改善を検討 ・野鳥病院については、改めてあり方について議論する。目標、構造、位置、人材、機能、経費などの項目について検討する 	<ul style="list-style-type: none"> ・野鳥の傷病施設として県内に1箇所しかない 	<ul style="list-style-type: none"> ・野鳥病院のあり方については、予算に係る問題が多いことから県と市川市で検討していく
⑧	他の湾岸施設との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・交流目的を検討し明確にしていく ・他所との連携や新たな参加を得ていく 		<ul style="list-style-type: none"> ・他所との連携のため、まず情報交換から始める（谷津干潟など）
⑨	国内外の団体施設との交流	<ul style="list-style-type: none"> ・他団体と交流協定を結ぶ ・海外交流のための宿泊施設との連携 	<ul style="list-style-type: none"> ・ラムサール登録された場所と比べると知名度が低い 	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館や他の自然公園などで行徳湿地を紹介してもらう ・谷津干潟が実施している協定を参考にする
⑩	自然との関わりを示す文化面の表現	<ul style="list-style-type: none"> ・CSRを活用し、伝統工芸を残す ・塩づくりや蓮田、水田を利用した自然・文化との触れあい ・舟、舟溜り、堰や水路などの文化との出会いと体験 	<ul style="list-style-type: none"> ・協力できる企業の誘致 ・散策している人たちが、塩づくりや蓮田、水田、が見える場所の確保 ・舟と舟溜り、堰や水路の再現 	<ul style="list-style-type: none"> ・行徳湿地の持つ都会の自然を企業に売り込む ・丸浜川の敷地を有効利用する